

初期近代英国における セネカの悲劇『テュエステス』の翻訳 (1)

——ジャスパー・ヘイウッド訳『サイエスティーズ』(1560)の翻訳と注解——

小林潤司・杉浦裕子・丹羽佐紀・山下孝子・大和高行
(共訳)

まえがき

本稿は、ジャスパー・ヘイウッド (Jasper Heywood, 1535–98) が英語に翻訳し、1560年にロンドンで公刊したセネカ (Lucius Annaeus Seneca, 前4頃–65) の悲劇『テュエステス (英語読みは、サイエスティーズ)』 (*Thyestes*) を日本語に訳し、注解を施したものである。

ストア派の哲学者であり皇帝ネロ (Nero) の若き日の家庭教師でもあったセネカは、10編 (今日では偽作と推定されている『オクタウィア』 (*Octavia*) を除くと9編) の悲劇を遺した悲劇詩人でもあった。

セネカ悲劇の中でも初期近代の英国の劇作家たちにとりわけよく知られていたのがこの『テュエステス』である。シェイクスピアの作品、特に初期の悲劇『タイタス・アンドロニカス』がこの悲劇を中心とするセネカ悲劇の強力な影響の磁場の圏内で構想されたことは明らかであり、ブロー (Geoffrey Bullough) の『シェイクスピア材源集成』 (*Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*, 8 vols., London: Routledge, 1957–75) においても『タイタス』の「材源」 (source) の一つとしてヘイウッド訳『サイエスティーズ』の抜粋が収録されている。

訳者のジャスパー・ヘイウッドは1535年に生まれた。父は、ヘンリー八世 (Henry VIII, 在位1509–47) の時代からメアリー一世 (Mary I, 在位1553–58) の時代にかけて活躍した劇作家ジョン・ヘイウッド (John Heywood, 1497?–1580?) である。オックスフォード大学で1553年に学士号 (BA), 1558年に修士号 (MA) を取得。1554年には既にマートン・カレッジのフェローに選任されていたが、1558年に辞職。同年、オール・ソウルズ・カレッジのフェローに就任。そこで、セネカ悲劇3編の英訳、『トロイアの女たち』 (*Troas*, 1559), 『テュエステス』, 『狂えるヘルクレス』 (*Hercules Furens*, 1561) を物した。エリザベス一世 (Elizabeth I, 在位1558–1603) が即位し英国国教会の体制を確立すると、辞職し出国。父と同様に熱心なカトリックであったことから、信教上の理由による亡命と考えられる。1562年にはローマでイエズス会

キーワード：エリザベス朝演劇、シェイクスピア、『タイタス・アンドロニカス』

に加入。その後、密かに英国に戻り、地下活動に従事するなどしたが、1583年12月に大陸に戻る船が遭難し、捕縛されてしまう。ロンドンに護送され投獄、拷問の憂き目に遭うが、フランスを経てローマに生還。晩年はナポリのイエズス会修道院で過ごした。1595年没。

本訳では、翻訳ではありながら英語劇として英国の劇作家に大きな影響を与えたヘイウッド訳の独自の価値を尊重し、また原典であるセネカの『テュエステス』と区別するために、標題としては『サイエスティーズ』の表記を用いるが、本文中の人物名としては、ギリシア神話中の人物としてのより一般的な表記「テュエステス」を用いている。その他の人物名や地名についても原則として原音を優先するが、日本語表記として広く浸透していると判断できる表記があれば、その原則を取って破った場合もある。

翻訳は主に下記のテキスト(1)に拠ったが、(2)所収のテキストの読みと注釈を採用した部分もある。原典であるセネカの『テュエステス』の日本語訳(3)も随時参照した。

- (1) Daalder, Joost, ed. *Thyestes*. By Lucius Annaeus Seneca. Trans. Jasper Heywood. New Mermaids. London: Ernest Benn, 1982.
- (2) Walker, Greg, ed. *The Oxford Anthology of Tudor Drama*. Oxford: Oxford UP, 2014.
- (3) 宮城徳也(訳)『テュエステス』、『セネカ悲劇集2』西洋古典叢書、京都大学学術出版会、1997年。

翻訳は、小林が準備した訳稿を、鹿児島近代初期英国演劇研究会メンバーである杉浦、丹羽、山下、大和がつぶさに検討し、必要な修正を施すという手順で行った。

本号には、題扉、献辞、第1の序詞(「訳者より本書へ」“The Translator to the Book”), 悲劇第1幕と第1のコーラスを収録する。本来であれば第1の序詞の後に収録して然るべき第2の序詞(「序文」“The Preface”)については、この翻訳の成立を考えるうえで示唆的な内容を含むため、後日、解題を掲載する際に合わせて訳出し、掲載することにした。

【題 扉】

二番目¹のセネカ悲劇、サイエスティーズの忠実なる英訳。

訳者ジャスパー・ヘイウッドはオックスフォード大学

オール・ソウルズ・カレッジの

フェロー。

¹ ヘイウッドによる英訳セネカ悲劇の2番目ということ(まえがき参照)。

ロンドン、フリート・ストリート、
故トマス・バースレット²の印刷所が刊行、
1560年3月26日。

〔献 辞〕

騎士、女王陛下の枢密院議員、
ジョン・メイスン閣下³が、
ますますの榮譽に包まれ、
さらなる美德にも恵まれ、
息災にて過ごされんことを、
ジャスパー・ヘイウッドが
日々祈り奉る。

きわめて貧しい人が恩人に、
ささやかな品を贈ることがありますが、それは、
裕福な人が高価で見栄えのする品を大量に贈るのと
感謝の念を表わすことにおいて同等です。
財貨を山と積み上げることで、[5]
差し伸べられた親切な手に報いる人に限って、
受けた恩義をいつしか忘れ去ってしまうものです。
それは、もう貸しも借りもないと思ひこむからです。
貧しき者は、かつて受け取った大いなる贈り物に
相応しい返礼ができませんから、[10]
軽少な贈り物に感謝の念を添えることで、
真珠や黄金にも勝る重みを加えるのです。
かつて強大な君主は貧しき者の手から
大根一本でも捧げられれば、喜んで受け取ったとか。
どうか閣下もこの小さき書物の捧げ物を [15]
なにがしかの価値あるものとしてご嘉納くださいますよう。

² バースレット (Thomas Berthelet) は1555年没。この翻訳の印刷と出版を監督したのはその甥のトマス・パウエル (Thomas Powell) だったと推定される。

³ 枢密院議員ジョン・メイスン (John Mason) は、オックスフォード大学の総長 (Chancellor)、オール・ソウルズ・カレッジのフェローも兼任していた。夭折したその息子トマス (Thomas Mason) とヘイウッドは友人同士だった (後日掲載の「序文」173行参照)。

それ自体はちっぽけな書物に過ぎませんが、
思いも寄らぬ大きな賜物を得ることができます。
始めから終わりまで殺伐として
実りを結ばぬ本ですが、[20]
(閣下より賜りし恩恵に相応しく)
天上の神が閣下の幸せな日々を長からしめ、
寿命が尽きたのちは速やかに天界に召されんことを祈る者の
不実の印とはお考えになりませぬように。

[第1の序詞]

訳者より
本書へ

小さき本よ、お前は、私から
栄えある人に遣わされる使者に他ならないのだから、
慎ましく振る舞い、恭しく跪き、
遜った態度を示すように。
あの方が執務で忙しくなさっている様子の時には、[5]
出しゃばってはいけない。
そんなことをしたら、叱責を受けるのも当然。きっと
こんな叱言を頂戴するだろう。
「これほど忙しそうにしている時に、
厚かましくもしゃしゃり出るとは生意気千万。[10]
今は大事な仕事に取り組んでいるのがわからぬか。
つまらぬ戯言に耳を貸している場合ではないのだ」
よく頃合いを見計らって、あの方がお一人で、
無聊を託っておられる時こそがお前には相応しい。
そのような折りに直ちに御前に進み出て、[15]
慎ましく閣下にご挨拶を申し上げるのだ。
あの方の御前で何事においても
慎み深くいられるよう、
記憶しておくべきことを伝えるので、
注意して聞き、習い覚えるように。[20]

まずは、お前が何者で、どこから来たのかお尋ねになったら、
標題をご覧いただくように。
自分の額⁴に名前が記してありますと申し上げるように。
そうすればお前のことも私のことも、よく知っていただける。
次に、あの方がお前の名前をご覧になっただけで、[25]
その先をお読みくださらない場合、
あるいは、こんなつまらぬ駄本で
吾輩を煩わせるとは怪しからんとお叱りがあれば、
ひたすらにお許しを請い願うこと。
お前は私という主人の使者なのだから、[30]
失礼を詫びた上で、罪は主人たる私にあると申し上げるのだ。
主人の命でまかり越しましたと申し上げたらよい。
あの方の許にお前を遣わすという、
私の増上慢をお咎めになったとしても、
私の無分別な行為をお叱りになったとしても、[35]
くれぐれも私の弁護をしてはならない。
わが罪を非難してもいけない。
ただ次の通りに申し上げるのだ。
罪は主人にあると考えられますし、
その罪を弁解するのは、ただ罪を倍加することになります、と。[40]
私の厚顔をご容赦くださり、
わが企てにお許しを賜りますようにと懇願するように。
栄えある人にとって価値ある行為とは、
貧しき捧げ物でもありがたく受け入れることなのだ。
自分は薄っぺらな書物であり、[45]
栄えある国の賓客に相応しからぬ捧げ物であるが、
敬意の印を身にまとい、
真の感謝の念を抱いておりますと誓って申し上げるのだ。
そして、自分が御前にまかり越したのは主人の代理としてであり、
それは主人の魂安かれと祈りを捧げるため。[50]
主人の感謝の心は、その印としてこれだけのものしか差し上げないとしても、
決してそれを下回るものではないと主人が認めていたと申し上げるのだ。

⁴ 訳書の題扉のこと。

他にあなたの方が何をおっしゃるとしても、
お前は十分な答えができるだろう。
以上がお前の任務だ。さあ行け、[55]
神々のご加護を祈り、その手にお前を委ねる。

[本文]

セネカのサイエスティーズ (テュエステス)

第1幕

タンタロス、メガイラ⁵ (登場)。

タンタロス 飢えた顎をあんぐり開けて、逃げ去る食物を追い求めていた私⁶を
不幸の座⁷から逃れ出させたのは、いずれの残忍なる復讐女神の計らいか？
いずれの神がこのタンタロスに、生者の住む世界を
再び見せているのか？ 地獄の燃えるような渇きよりもひどい苦しみが
下界の湖に見つかったのか。それとも、眼前の食物を求めて口を開けても [5]
食べられないひもじさよりも苦しい災厄がか？ シシュボスが虚しく運び上げている
不安定で転がりやすい巨岩⁸を、私に肩代わりさせようというのか？
わが体をイクシオンの車輪⁹よりも早く回転する車輪に縛りつけ引き裂くつもりか？
あるいは、ティテュオスの苦しみを味わわせるつもりか？ 成長し続ける内蔵を
汚れた禿鷲どもが腹一杯啄むが、[10]
昼間に食ら食われた腹も、夜には元通り癒え、
不思議な臓腑は消尽されることなく、新たな餌食として供されるというあの苦しみを。¹⁰
どのような苦しみが割り振られているのか？ ああ、誰かは知らぬが、
死者たちの魂に新たな拷苦を与え、永遠に喜びを取り除く、

⁵ 復讐女神の一人。

⁶ タンタロスとは、神々の秘密を漏らしたための罰として、冥界で水上に張り出した木の枝に吊るされた。渇して水を飲もうとすると水が退き、餓えて木の実を取ろうとすると枝が跳ね退いて、永遠に飢えと渇きに苦しめられたとされる。

⁷ 不幸の座——地底にあると想定された冥界ハーデース。タンタロスが幽閉されていた場所。

⁸ シシュボスはコリントスの王で、死後地獄に落ち、巨岩を山に押し上げる罰を負わされた。岩は山頂に近づくたびに転がり落ちて、苦行は隙限がなかったという。

⁹ イクシオンはラピテス族の王。ギリシア神話の最高神ゼウスの妻ヘラを犯そうとして、ゼウスの怒りに触れ、永遠に回り続ける火炎の車輪に縛りつけられる罰を受けた。

¹⁰ 巨人ティテュオスはゼウスとガイア女神の子。ヘラに唆されてレトを襲い、アポロンに殺された。冥界で永遠に生肝を禿鷲に啄まれる責め苦を受けた。

情け知らずな審きの霊たちよ、いかようにもわが堪え難き苦しみを増すがよい。[15]

冥^{くら}い牢獄の番犬ケルベロスですら知ることを恐れ、

地獄そのものですら見れば震えあがる苦痛もあえて辞さぬ。その不安で

私も震え上がるような、そんな苦痛を探し出せ。見よ、ここに立ち上がるのは

わが子孫。悪事にかけては父祖の罪を凌ぎ、父祖を無罪同然にするような

極悪なる末裔。かつて試みられたことがない罪惡^{でから}を敢えて冒す輩。[20]

この非道の国にまだ空きがあるのなら、

わが末裔がそこを満たすであろう。わが息子ペロプスの家が立っているあいだは、

ミノス¹¹の仕事が絶えることは決してないのだ。

メガイラ

出でよ、おぞましい霊よ、

邪悪な家の神々の心を復讐女神の怒りで乱すがよい！

あらゆる罪をひとつひとつ順番に犯す競争をさせ、[25]

互いに剣を抜いて相争わせよ。程よい怒りなど望んで得られるものではなく、

廉恥心もない。ただ盲目の怒りに復讐心を燃え立たせ、

父祖から受け継いだ怒りを保ち、子供たちの子供たちが殖え広がるにつれて

持続する罪惡がさらに長く続けばよい。過去の罪を厭う機会すら与えず、

さらなる新たな罪を見せるがよい。ひとつの罪からひとつならず罪を [30]

生み出すがよい。罪が報いによって帳消しになる前に

罪を増殖させるがよい。傲慢なる同族から王国の法は裸足で逃げ出し

漂泊^{さまよ}うがよい。なべて定めなき浮世の転変が、

見通せぬ運命の計らいで、不安定な王たちのあいだを行きつ戻りつするがよい。

強大なる者は悲惨へと転落し、失意の者は権力の頂点を極めるがよい。[35]

帝国の転覆も運次第。統治の権利を与えると同時に奪うがよい。

罪ゆえに国を追われし者は、たとえ神の計らいで帰郷できたとしても、

新たに罪を着せられ、誰からも憎まれ、

自分でも自分を憎むがよい。怒りにまかせて非道の限りを尽くすがよい。

兄弟は互いの怒りに怯え、父は息子を、[40]

息子も父の力を恐れるがよい。嬰兒は無残に殺され、

さらに悪い運命を背負って生まれてくるがよい。敵意に燃える妻は夫を待ち受け、

裏切りの策略によって死へと導くがよい。大軍が海を渡って攻め寄せ、

國中至るところが戦場となり血にまみれるがよい。¹²

¹¹ 冥界の裁判官。

¹² テューダー時代の英国民が抱いていた内乱勃発への不安と響きあったであろう一節。このセネカ悲劇の翻訳が刊行された翌年（1561年）にロンドンの法学院で上演された英語の悲劇にも次のような一節が見

いまだ見ざる諸国を征服した偉大な將軍たちの頭上に [45]

欲望の神が勝ち誇るがよい。邪悪な家では、姦通が

もっとも軽い罪と見なされるがよい。同胞の胸に生まれる信頼も忠誠も

消え失せてしまえ。お前たちの厭わしい犯行を天に隠さず見せれば、

天高く瞬く星々が、変わらぬ輝きで彩り飾っている蒼穹も一面 [50]

暗黒の闇夜となり、太陽も二度と輝くことはないだろう。

邪悪な家の神々を目覚めさせよ。憎悪を掻き立て、殺戮せよ、謀殺せよ。

タンタロスの家を犯罪と不和で満たすがよい。

高く聳える柱に飾りつけをし、門には月桂樹を掲げて

緑に彩り、お前の帰還にふさわしく [55]

明かりを灯せ。トラキアでかつて起こった犯罪¹³が幾重にも倍加して

繰り返されるがよい。なぜ伯父アトレウスは着手を遅らせているのか？

テュエステスはまだ子供たちの運命の日を嘆かないのか？

下で燃え盛る炎の熱ですでに大鍋は煮立っている。そこでやっと彼は息子たちを

見出すのではないのか？ 手足はばらばらに切断され、[60]

父祖伝来の炉火は子供たちの血で汚されるがよい。

その火で宴の御馳走が調理されるがよい。このようなもてなしを受けるのは

お前にとって初めての罪ではない。見よ、今日はお前の休養日。

お前の空腹にこの御馳走を贈ろう。

汚れ果てた食物で飢えを満たせ。ワインに血が注ぎ入れられ、[65]

飲み干されるのを目の当たりにするがよい。ほら、お前も避けて通る

祝宴の御馳走が見つかったぞ。待て、一目散にどこに逃げるのだ？

タンタロス 地獄の沼と川へ、飲もうとすると逃げる湖へ。

たわわに実る果物を食べようとするすると逃げる果樹へ。

忌まわしい地獄の暗い牢獄へと帰ることを [70]

許してくれ。地獄でのこれまでの苦しみが軽すぎると思うのなら、

わが身を湖ではなく火の河プレゲトン¹⁴の燃えさかる奔流に投げ入れ、

より大きな苦しみを味わわせてもよい。

誰であれ、運命の定めによって鋭い苦痛に耐えている者よ、

られる。「戦火と剣によって、この国に生まれた民は殺され、／家族や親類同士で殺しあう。／父は知らずに自分の息子を殺し、／息子は父親を殺して、それに気づかぬことであろう」(サックヴィルとノートン『ゴーボダック』第5幕第2場)

¹³ アテナイの王女でトラキア王テレウスの妻プロクネは、夫が妹ピロメラを凌辱し生ませた息子を殺害しその肉を夫に食べさせた。この悪事の罰として、神々により姿かたちを燕に変えられたという。

¹⁴ 冥界を流れる火の河。

誰であれ、洞窟や廃墟のなかで巨岩の落下に怯えながら [75]
横たわっている者よ、飢えたライオンの咆哮、あるいは知るも恐ろしい
残忍な復讐女神たちの声が響き渡る
地獄の洞窟にいる者よ。あるいは、その身を半ば焼かれ、
激痛に苦しみながら松明を払いのけようとしている者よ、
再び地獄へと急ぎ戻るタンタロスの声を [80]
聴くがよい。(実際の経験に学んだ) 私の言葉を信じて、自分の苦痛を
よく愛せ。ほんの些細な苦しみなのだから。いつになったら私は
この世の光から逃れることができるのだろうか？

メガイラ 先ずは恐ろしい不和でこの家の平和を乱せ。
口論と争いをもたらせ。国王たちに剣を愛する
邪なる心を抱かせよ。残酷なる胸を憎悪に満ちた心臓ともども [85]
狂気の動乱によって刺し貫け。

タンタロス 苦しみを与えるのではなく、
苦しみに耐えることこそが私にふさわしい運命だ。大地から吹き出す毒気が
不思議な作用で大量殺戮を行う悪疫のように、私はこの世に
遣わされる。私が孫たちの心を、かくも厭わしい犯罪へと
向けるのか？ おお、天上の神々の偉大なる父よ、[90]
そしてわが父よ（父と認めるのは憚られるものの）、たとえわが舌が
より大きな苦しみで苛まれるとしても、このことだけは決して
黙ってられない。私は警告する、聖なる手が悲惨な殺戮や
狂乱の復讐女神の恐ろしい逆上によって、聖なる神殿を
穢すことがないよう、私がそのような罪を阻んでみせる。[95]
なぜ鞭を振るって私を恐れさせる？ のたくる蛇を見せて
脅かす？ 空腹に居座る飢えを、
なぜ呼び覚ます？ 渇きで火がついた心は、今やわが胸中で
煮え立ち、腹の中では燃え上がる炎がめらめらと燃え上がっている。

メガイラ お前について行くぞ。この家を怒りと狂気で一杯にせよ！ [100]
家中の者を駆り立て、互いの血に
飢えさせるのだ。お前がこの家に入ってくるのを察して、
みんながお前の邪悪な気配を感じとり身震いしはじめた。
もういいだろう。地獄の洞窟へ、よく知られた厭わしい湖へ
戻るがよい。お前が重い足取りで踏みしめれば、大地すらも [105]
さらに悲しむ。水源から湧き出る水の勢いが衰え、大地に沈み込むのが

見えるか？ 熱波にさらされ、河床が干上がったのに見えるか？
さらに熱い熱風が雲を吹き払うのに見えるか？
木々は葉を落とされ、枯れ果てた森に立ち並ぶのは、
果実が逃げ去ったむき出しの枝ばかり。かつては両側に迫る海が [110]
波音高く浸食せんと迫っていた
地峡も、いまや広がり、
海鳴りは遥か遠くに聞こえる。
レルナ川は逆流し、フォロニデス川も同様に
その流れを止められた。アルベウス川もいつもの川筋で聖なる水を [115]
流すことをやめた¹⁵。キタイロンの高峰¹⁶もその安定を失い、
震える頂から白銀の雪を払い落とす。
アルゴス¹⁷の尊い畑はかつての早魃を再び経験することを恐れている。
そう、他ならぬタイタン¹⁸も、この世界をいつも通りに廻らせ、
逆向きに引っ張る陽を力ずくで元の道筋に戻すべきか、迷っている。[120]

コーラス

どなたか神様が、このアルゴスの町を、
そして、いにしえより名高いピサ¹⁹の木陰、
あるいはコリントス近辺のその他の王国を愛してくださるなら、
あの双子の港、あるいは海峡によって分断された海を、
タウゲトス山地²⁰の雪を愛してくださるなら、[5]
(それは、冬になればサマルティア²¹から吹く
北風が峰々に積もらせ、
夏には毎年吹く風が同じ速やかさで溶かしてしまう雪だ)
オリンピックスと呼ばれる競技会で名高い、
澄んだ冷たい水が流れるアルベウス川の流域を愛してくださるなら、[10]
そのやさしい力によって、繰り返される争いを抑え、

¹⁵ レルナ川、フォロニデス川、アルベウス川はいずれも古代ギリシアの川。

¹⁶ キタイロンはギリシア南東部の山。デュオニソス神を祀る。

¹⁷ ギリシアのペロポネソス半島北東部の古都。

¹⁸ 父ウラノス（天空）と母ガイア（大地）の間に生まれた巨神たちとその子孫。

¹⁹ オリンピアの古称。

²⁰ ペロポネソス半島南部、アルゴスの南にある山地

²¹ バルカン半島の北部から現在の南ロシアに伸びる地域。

この地にその災いが降り掛からぬようお計らいください。
祖父よりも劣る孫が私たちのなかから現われたり、
よりおぞましい犯罪が子や孫たちを喜ばせたりすることがないようにしてください。
渴けるタンタロスの邪悪な末裔が [15]
ついには怒り狂うのに飽きはて、正気に戻るようになしてください。
もうたくさんです。正しい行為も悪しき行為も
役には立たない。女主人の信頼を裏切ったミュルティルス²²は
自分も同様に相手を信頼して裏切られ溺死した。
彼が墜落した海の名前はその名にちなんで変えられ、[20]
広く知られるきっかけとなった。船乗りたちに
これほど知られた話はない。
邪な剣によって幼子は屠られた。
父の口づけを受けようと駆け出した瞬間のことだ。
祭壇に捧げる生贄には相応しからぬ年齢で [25]
お前の手によって、おお、タンタロス、殺され、切り刻まれ、
神々の食卓に供えられたのだ。
この食事の報いとして永遠の飢餓と渇きという
罰が下される。この無慈悲な御馳走への報いとして
これ以上相応しい苦しみはあるまい。[30]
渴いた喉に欺かれてタンタロス立ちつくす。
お前の邪悪な頭の上にぶら下がっているのは、
ピネウスの鳥よりも逃げ足が速い食べ物なのだ。
実を結んだ枝が四方八方にしなり、
すべての果実の重さでゆらゆら揺れては、[35]
飢えてあんぐり開けた口を惑わす。
果実をががつと食らい食おうとしても、
そのたびに欺かれるものだから、それに触れまいとし、
目を逸らし、口を固く結ぶと、
飢えが噛みしめた歯茎に閉ざされて居座る。[40]
だがその時、枝の一本一本がその豊かな実りを
低く垂らし、リングは高くから

²² ビサの王オイノマオスの戦車の御者。主人を裏切り、タンタロスの子ペロプスが王女ヒッポダメイアと結婚するのを助けたが、後にヒッポダメイアを犯そうとしたためにペロプスによって海に投げ込まれ、ペロプスの家に呪いをかけながら溺れ死んだ。

葉をしならせて、触れなば落ちん素振りを見せ、
飢えを掻き立て、空しく、両手を伸ばして
取らせようとするが、手を前に伸ばして届きそうになると、[45]
たちまち欺かれ、収穫は再び
お預けになり、移り気な果実は目の前から消えてしまう。
続いて渴きが飢えに劣らず彼を苦しめる。
渴きのあまり、沸き立つ血潮がまるで火が点いたかのように
燃え上がると、哀れなる者は流れを呼び寄せようとするが、[50]
口まで到達すると、その刹那、身を翻して
逃げ去り、乾いた浅瀬から流れ落ち、
追いかける彼を見捨ててしまう。彼が飲めるのは、
干上がってしまった深みの塵芥にすぎないのだ。

[(2) に続く]

付 記 この翻訳は、科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）（基盤研究（C））「シェイクスピア劇の材源・改作とイギリスの帝国化400年の関係についての研究」（研究代表者 大和高行）の成果の一部である。